

茨城県立こども病院だより

令和6年9月30日 第58号



表紙写真：新生児救急車(ラッコ号)

指定管理者 社会福祉法人 関東済生会茨城県済生会

当院の小児救急医療の現状

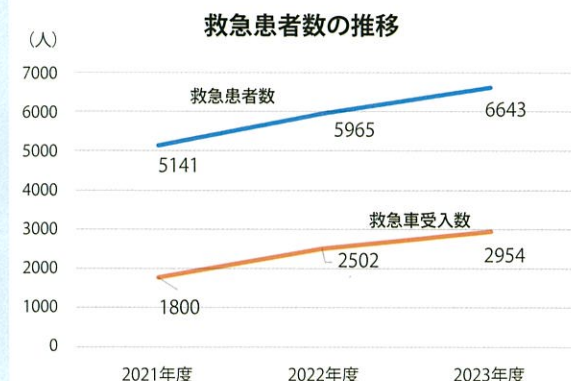
病院長 新井 順一

当院は、県央・県北地域の小児救急中核病院として1次（一部時間帯）から3次救急まで担当しています。今回はその現状について説明させていただきます。

下のグラフに示すとおり、この3年間に救急患者数、救急車受入（救急搬送）数とも増加傾向にあります。2021年度と比較して2023年度は救急患者数が29%増加しています。また、救急搬送の割合も2021年度の35%に対し、2023年度は44.5%と増加しています。救急搬送の増加は当院に限ったことではなく、搬送困難例の増加など大きな問題となっているのは周知のことです。2023年度における水戸地区救急医療協議会管内からの救急搬送照会数は2,801件で、応需率は96.8%とそのほとんどを受入れました。また、同管内における15歳未満の救急搬送件数全体は3,543件で、そのうち当院での受け入れは77.6%で、地域を水戸市に限定しますと89.8%を受け入れており、小児救急搬送のほとんどを当院が担当していることとなります。休日・夜間救急体制の充実のために、看護師の増員を行いましたがいずれも十分ではありません。

厚生労働省が、小児救急入院施設の集約化を進めてきたこともあり、県央地域でも当院を中心にかなりの集約化が進みました。しかし、小児科の入院数は感染症の流行などの影響を受け病床利用率が不安定となり、その多くは不採算に陥っています。当院の休日夜間診療は、新生児科1名、ICU1名、小児科医2名の当直体制で行っていますが、医師の働き方改革により、宿日直許可を得ることが難しい部分は、変形労働時間制を導入したため、平日日中の医師が少なくなっています。小児救急を維持する上では、小児外科医、脳外科医、整形外科医なども必要ですが、現在当院の脳外科の常勤医師が不在となっており、大変ご迷惑をおかけしております。

小児救急を維持するには、安定した経営と医療スタッフが必要ですが、今年度の診療報酬改定、医師の働き方改革、諸物価高騰、人件費増などは当院にとっても逆風となっています。安心して出産、子育てができる地域作りが少子化対策の重要な基盤であります。関係するみなさまと協力して現在の救急医療体制を維持していきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。



第33回日本小児泌尿器科学会総会・学術集会の開催報告

この度、「継承×進化+創造→共有」をテーマに、第33回日本小児泌尿器科学会総会・学術集会を2024年7月10日(水)～12日(金)に水戸市民会館で開催させていただきました(①)。現地参加のみの形式としましたが、409名の皆様に御参加いただきました。

初日には教育セミナー、医療安全講習会、USハンズオンセミナーを行いました。USハンズオンセミナーでは当院が誇る小児超音波診断・研修センターの精鋭スタッフ4名が講師を担当し、20名の受講者に精巣のUS診断におけるコツを伝授しました(②)。モデルを務めてくださった男子中学生の有志4名からは、外陰部のUS操作に対して「僕たちは医学の発展のために貢献したいので平気です」という感動的な言葉をいただきました。受講者からは好評を博し、このように講師やモデルに恵まれた条件下で企画できたことに感謝いたします。

2日目からは口演2会場とポスター会場で各セッションが進行し、活発な意見交換が行われました(③)。招請講演「小児泌尿器科に魅せられて」(山高篤行先生)、特別講演1「聴覚障害を持つ医師として経験した楽しみや苦しみ」(今川竜二先生)、特別講演2「小児のセクシャルアビューズ」(山田不二子先生)、理事会企画「新専門医制度の歴史と今後の課題」(渡辺毅先生)の各御講演は、聴衆の関心が高く、たいへん勉強になりました。

講演以外の指定演題(56演題)は、その領域のスペシャリストの先生方に御発表いただきました。性分化疾患、総排泄腔疾患、小児泌尿器科腫瘍、神経因性膀胱に関する4つのシンポジウムの中で、基調講演(菊水健史先生、青山興司先生、西山博之先生、室井愛先生)を聴講しました。9つのワークショップでは、急性陰嚢症、臨床研究/共同研究、腎盂形成術、忘れられない症例、尿道下裂術後の合併症対策、夜尿症、尿路感染症、VUR手術についてプログラムを構成しました。2つの会長特別企画では、「停留精巣診療ガイドライン第2版」と「小児泌尿器科疾患における保険診療の変遷」について概説していただきました。また、共催セミナー(3つのランチョンセミナー、1つのスポンサードセミナー)のほかに、ハラスメント防止講習会を行いました。

公募演題には190題を御応募いただき、学会賞候補演題が13演題、THE SECOND～ミドルエイジ・コンテスト～(学会賞応募の対象となる若手の年齢を過ぎて中堅的または指導的な立場で活躍中の会員が対象)が12演題、一般演題(口演、ポスター)が165演題となりました。

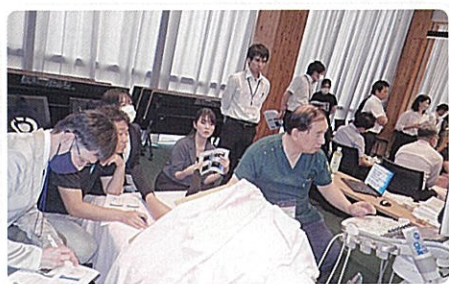
会員懇親会は、オープニングでハーレー型の子供用自転車で登場した会長が自前の衣装で2曲を熱唱し、抽選会の前には水戸黄門に扮して寸劇を披露し、手作りのおもてなしとさせていただきました(④)。

3日間の学術集会では活発かつ有意義な意見交換が行われ、盛会のうちに終了することができました。最後に、本学術集会の開催にあたり多大な御支援・御協力をいただきました皆様に、心より感謝申し上げます。



① 学術集会ポスター

小児外科、小児泌尿器科 矢内俊裕



② USハンズオンセミナーの風景



③ 講演会場の風景



④ 会員懇親会の風景

茨城県立こども病院 クリニクラウン

コロナ禍で休止していたクリニクラウンによる病院訪問を7月から再開し、こども達やスタッフから「久しぶり」「待ってたよ」という声が上がりました。

【まっけたよ】と似顔絵を書いて待っていたお子さんは絵をプレゼントして満足気な顔を見せ、クリニクラウンのお二人は感動していました。

また、静かに寝ていたお子さんもクリニクラウンの訪問で表情が変わり、興味津々な様子も見られ、スタッフも一緒に踊ってしまいました。

そのようなこどもの姿を目のあたりにして、遊びの大切さを実感しています。



茨城県立こども病院 夏まつり



変化の少ない療養生活の中で、季節感や非日常的な経験や思い出作りの機会を作り楽しみを感じてほしいと、院内で夏まつりを実施しました。

『スーパーボールすくい』『水ヨーヨーつり』『射的』『がらがらくじ』『カップインゲーム』を行いました。こども達はゲームがとても上手で予想以上の景品をゲットして、たくさんの笑顔を見る事が出来ました。なかには、浴衣やじんべいを着て参加してくれたお子さんもおり、実行委員も病院Tシャツやはっぴを着て、夏まつりを一緒に楽しみました。





昨年度もたくさんのご寄付を賜り
厚く御礼申し上げます。

当院では、企業・団体や個人の皆様に善意のご寄付をお願いし、子どもたちのための図書・玩具の購入や病院内学級の整備など病児の療養環境の向上を図ると共に、健康保険外の先端医療の推進を行う活動を積極的に展開しております。

2023年度寄付金一覧

寄付者名	金額
やまわきこどもクリニック 院長 山脇英範 様	1,000,000 円
株式会社タイガ 様	1,000,000 円
つくばOAKライオンズクラブ 様	150,000 円
KDDI株式会社 様	100,000 円
ライオンズクラブ国際協会333-E地区 様 鹿島ライオンズクラブ 様	291,605 円
つくばアウルライオンズクラブ 様	60,000 円
株式会社ナムロック 様	200,000 円
横浜幸銀信用組合 様	500,000 円
水戸東ロータリークラブ 様	50,000 円
佐藤玄樹 様	100,000 円
高橋瑛太 様	165,000 円
H.文子 様	100,000 円
青木恵子 様	100,000 円
小林徹 様	200,000 円
外 団体 1件、 個人 7名 783,788円	計 4,800,393円



2023年度 寄付物品一覧

寄付者名	寄贈品
ヒスターズナウつくば 様	バルーン (ディスプレイ) 150個 バルーン (プレゼント) 50個 付き添いのご家族へのケアセット 50セット DVDプレーヤー 1台 ・ DVD 5本
骨髄バンクを支持するいばらきの会 様	ぬいぐるみ 150個
日本出版販売株式会社 様 日本児童図書出版協会 様	図書 103冊
NPO法人ゴールドリボンネットワーク 様	玩具 (ブロック) 13箱 ・ 図書 (図鑑) 14冊
株式会社メディカルレビュー社 様	ぬいぐるみ 2体 ・ 図書 2冊

外 団体 2件、個人 15名 (座位保持チェア、バギー、車椅子、図書、玩具、文具等)



当院では皆様に広く善意のご寄付をお願いしております。
皆様の格別のご理解とご支援をお願いいたします。

窓口

経営企画課
寄付担当

(TEL) 029-254-1151 内線 9213
(E-mail) ich-kifu@ibaraki-kodomo.com



1985年の開院以来整形外科常勤医がいなかった茨城県立こども病院ですが、2019年度から整形外科医が常勤するようになりました。徐々に対応できる疾患を増やし、現在に至っています。

今回は、小児整形外科の最近の話題についてご紹介いたします。

発育性股関節形成不全（先天性股関節脱臼）

発育性股関節形成不全（先天性股関節脱臼）は、文字通り、股関節が外れてしまう疾患です。

早期に発見できれば外来での装具療法が奏功しますが、装具で整復できなかった症例や、発見が遅れた症例には牽引療法などの入院治療が必要になります。しかし、それでも整復できない場合や牽引療法の適応がなくなってしまったような場合には手術が必要になります。

そのような大変な治療を行わずに済むように、全国の小児科や産婦人科、あるいは市町村の保健所等で股関節検診（一次検診）を行っています。私たち小児整形外科医の所属している日本小児整形外科学会では、股関節脱臼を疑うべき推奨項目を設け、スクリーニングをしています。

以下の5つの推奨項目のうち、2つ以上認められた場合には、より専門性の高い整形外科での二次検診を勧められます。

1. 股関節開排制限：左右差に注意
2. 大腿または鼠径皮膚溝（しわ）の非対称：位置、数、深さ、長さの左右差に注意
3. 家族歴：血縁者の股関節疾患
4. 女児
5. 骨盤位分娩（帝王切開時の肢位を含む）

推奨項目を見てみると、逆子の女の子であるだけで、引っかけり、二次検診を受ける必要性が出てきます。ちょっとおかしいのではないかと思われる方もいるかもしれませんが、見逃されてしまうと治療がより大変になるため、細かい網で拾い上げて見逃しをしないようにしているわけです。

一次検診で指摘されたり、自分のお子さんがこれらの推奨項目に当てはまるのではないかと思われるのなら、二次検診を行っている医療機関の受診をお勧めします。

二次検診の可能な医療機関は下記のホームページをご参照ください。

日本小児整形外科学会>赤ちゃん検診後の股関節検診かかりつけ施設

<http://www.jpoa.org/7793/>

もちろん当院でも二次検診を行っております。